日本で行われている音楽活動エル・システマの可能性と課題

― ホワイトハンドコーラスに焦点を当てて ―

Potential for and Challenges of the El Sistema Musical Effort in Japan – Focusing on the White Hands Choir –

小　田　桜　乃*　　根　津　知佳子**
Sakurano ODA　　Chikako NEZU

要　約　1975 年，南米ベネズエラにおいて，貧困問題の音楽による解決を目指す El Sistema という社会政策が生まれた。その 20 年後には，障害者による音楽の機会を保証するために White Hands Choir が始まった。そして前者は 2012 年から，後者は 2017 年から日本でも行われている。そこで本論文では，ベネズエラと日本における活動の相違や特色について明らかにし，日本における活動の可能性と課題について検討することを目的とした。結果として，ベネズエラと日本における社会情勢や教育制度などは異なるが，「すべての子どもに音楽の機会を与える」という El Sistema の理念の一つを継承し，日本に合わせた形態で柔軟に活動していることが示された。さらに，El Sistema によって社会性が身につきコミュニティー意識が育つなど，社会的・教育的側面も見られた。そして課題には，日本各地における活動の普及が挙げられた。

キーワード：エル・システマ，ホワイトハンドコーラス，インクルーシブ，貧困，音楽活動

Abstract　In 1975, a social policy called El Sistema was born in Venezuela in order to solve the problem of poverty through music. Twenty years later, the White Hands Choir was started to ensure musical opportunities for the disabled. The former has been implemented in Japan since 2012, and the latter since 2017. The purpose of the current study was to ascertain the differences between the characteristics of efforts in Venezuela and Japan and to examine the potential for and challenges of efforts in Japan. Although the social conditions and educational systems in the two countries different, they inherited one of El Sistema's principles: "giving every child the opportunity to make music." Japan flexibly implemented those efforts. In addition, El Sistema has social and educational aspects, such as the encouragement of socialization and the development of a sense of community. An issue that was identified was the spread of these efforts to various parts of Japan.

Key words：El Sistema, White Hands Choir, Inclusive, Poverty, Musical Activity

はじめに

日本の子どもを取り巻く様々な問題はこれまでに，待機児童，少子化，虐待，貧困など，多岐にわたって挙げられてきており，筆者は特に教育の平等性や子どもの貧困に関心を寄せてきた。一般に，社会的弱者[注 1)]といわれる子どもは社会的な立場が弱く，自分自身の力でその立場による困難から脱することは難しいため，大人からの適切な支援や援助が必要とされる。社会的弱者の中には障害者も含まれており，近年では，そのような社会的弱者を取り残すことのないインクルーシブ（包摂的）な〈inclusive〉共生社会[注 2)]を目指すことが受け入れられている。

*　家政学研究科児童学専攻
Graduate School of Home Economics,
Division of Child Studies
**　人間生活学研究科人間発達学専攻
Division of Human Development,
Graduate School of Human Life Sciences

インクルーシブという概念は，特に福祉や教育の面で用いられることが多く，日本では，文部科学省が共生社会の形成に向けた教育システム構築を推進している。文部科学省（2012）によると，共生社会の形成やインクルーシブ教育システム構築のために特別支援教育が必要不可欠であるとしており，基本的な方向性として，障害のある子どもと障害のない子どもができるだけ同じ場で，共に学ぶことを目指すべきであると報告している [1)]。しかし，実際の保育施設や教育現場において，障害の有無に関わらず子どもたちを同じ場で一斉に保育・教育することは保育者や教師にとって大きな困難になると予想される。障害の程度や特性は子ども一人ひとりによって異なり，障害に対する専門性をどれほど有しているかは，保育者や教師によって差が生じると考えられるからである。とはいえ，多様な子どもが同じ場で学ぶ機会を保障することはインクルーシブな共生社会を目指すうえで欠かせないことは確かである。また，多様な子どもたちが同じ場で共に過ごし，共に活動する中で得る学びは，子どもたちにとって貴重な体験となることだろう。

そのような現状の中，筆者は，障害の有無に関わらず，多様な子どもたちによって行われている音楽活動を知った。そして，それはどのようなものであるかを明らかにするため，2022 年 4 月から，日本で行われているホワイトハンドコーラスの活動に参与し始めた。実際に活動に入り込む中で，ベネズエラで行われているエル・システマ〈El Sistema〉との相違や，それぞれの国での特色について関心を寄せるようになった。そもそも，国の社会背景や風土，教育環境などが異なり，それらの相違が活動内容に影響を与えることは容易に想像できるだろう。そのため，ベネズエラと日本，それぞれにおけるエル・システマ〈El Sistema〉とホワイトハンドコーラス〈White Hands Choir〉について今一度概観し，深い理解を得ることを本論文の目的とする。また，それらの違いについて把握したうえで，日本におけるエル・システマの可能性と課題について考察する。なお，これより，ベネズエラでの活動を指す場合は El Sistema，White Hands Choir と表記し，日本での活動を指す場合はエル・システマ，ホワイトハンドコーラスと分けて表記する。

1.　ベネズエラで始まった社会政策

1.1 ベネズエラの基本情報と教育制度

ベネズエラで始まった社会政策 El Sistema について概観するため，まずはベネズエラの基本情報について記しておく必要がある（Table 1）。

Table 1　Basic information on Venezuela [2)]

国名	シモン・ボリバル共和国 〈República Bolivariana de Venezuela〉
国土	南アメリカ大陸の北端に位置し， カリブ海に面する
面積	約 91 万 2,000km^2（日本の約 2.4 倍）
人口	2,795 万人（日本の約 23%）
人口密度	34.5 人/km^2
首都	カラカス〈Caracas〉
公用語	スペイン語
先住民族	52 の先住民族 （構成比が最大なのはワユー族の 57%）
宗教	96%がカトリック教徒， 次いでプロテスタント

在日ベネズエラ大使館ホームページには，ベネズエラの魅力として広大で多様性に富んだ国土が紹介されており，国土の40%が自然保護区域であることからも自然豊かな美しい国であることがわかる。ベネズエラはかつてスペインの統治下にあり，1811 年にスペインより独立したという歴史から，公用語にスペイン語が用いられている。さらに，多数の先住民族がいることに配慮し，シモン・ボリバル共和国憲法第 9 条では先住民族の諸言語を尊重することを定めている。

次に資源について触れるが，ベネズエラは世界有数の石油産出国であり，同国の経済は石油収入に大きく依存している。外務省は，「不安定な経済運営もあり，南米で最も高いインフレ率や物資不足等の問題を抱えている。2020 年も各地で停電，断水，ガソリン不足が相次ぐなど，社会インフラの悪化が問題となっている [3)]」と報告する。さらに，外務省の海外安全ホームページ（2022）にて，2021 年に発生した暴力行為に起因する死者数は 11,081 人（10 万人あたり 40.9 人）で，前年の 11,891 人（10 万人あたり 45.6 人）から減少しているものの，依然として中南米でも高い水準となっていることを報告している [4)]。厚生労働省の「人口動態調査」によ

ると，日本での他殺総数は 2020 年に 251 人，2021 年に 256 人であった[5]。この数値だけを見ても，ベネズエラは日本のような安全な環境ではないことがわかる。ベネズエラは世界的に見て貧困や犯罪，麻薬などの社会問題が深刻であり，子どもはそのような危険にさらされている現状であるといえよう。

続いて，ベネズエラの教育に関する基本事項を以下に示す（Table 2）。

Table 2　The educational system in Venezuela[6]

初等教育	6 年間（6 歳～）	義務教育
中等教育	前期：3 年間（～15 歳）	義務教育
	後期：2 年間	
高等教育	5 年間	

ベネズエラにおける義務教育は 6 歳から 15 歳までの 9 年間であり，後期中等教育からは自分の進路に合わせ，大学教育準備課程と職業教育課程から選択する[7]。次に教育の現状について以下に示す（Table 3）。

Table 3　Current states of education in Venezuela[8]

初等教育の純就学率（2017 年）	87.4%
初等教育の第 1 学年の純入学率（2017 年）	70.5%
初等教育の最終学年までの継続率（2016 年）	83.0%
中等教育の純就学率（2017 年）	73.2%
前期中等教育の修了率（2017 年）	75.2%

Table 3 より，約 3 割が初等教育課程に第 1 学年の 6 歳時点で入学しておらず，教育を受けるべき年齢にも関わらず，教育の機会を奪われていることがわかる。さらに，義務教育期間である前期中等教育の修了率は 75.2％と低い。以上のことから，義務教育開始時に教育を受けられない子どもや，入学したとしても途中で留年したり退学したりする子どもが多いといえる。

また外務省は，ベネズエラの児童について，以下のように報告している。

> 児童たちに悩みを聞いてみると，市内は特に治安が悪いため，単独で外を歩くことができず，友達との外出にも必ずいずれかの親が同伴するため，学校の外で友達と思う存分一緒に過ごせないこと，また，国内の政治経済や社会状況が不安定なため，国外へ引っ越してしまう児童も多く，クラスメートと離ればなれになってしまうことなどがあげられました[9]。（下線は筆者による。）

日本において，子どもが 1 人では出歩けないほど治安の悪い場所は滅多にないが，下線部からわかるように，ベネズエラにおいては市内ほど危険で，街に子どもたちの居場所はないといっても過言ではない。ベネズエラでは，街を歩けば犯罪に巻き込まれ，一般人に銃弾が飛んでくることもある。このような危険な場所では子どもの生命がおびやかされている。日本でも近年，子どもの貧困が問題視されてきているが，ベネズエラはその深刻さが桁違いであるといえる。このように社会情勢が不安定であり，社会的な貧困も顕著であることから，十分な教育を受けることができない子どもがいることは知っておくべき事実である。

1.2 El Sistema の概要

以上で述べたような国土や国柄に育まれながら，また，不安定な社会情勢の中で El Sistema は 1975 年にホセ・アントニオ・アヴレウ〈José Antonio Abreu, 1939－2018 〉博士（以下，アヴレウ博士と表記する。）によって始められた。El Sistema はスペイン語表記であり，「The system」と英訳できる。また，日本語では「制度」，「体制」，「系統」，「組織」などと訳すことができる。アヴレウ博士は多分野に精通していたとされる。彼は，国立の音楽大学で学んだ音楽家であると同時に，国会議員や文化大臣を務めた政治家でもあり，経済学者と紹介されることもある。1950 年代の終わりから 60 年代の初め，カラカスは石油マネーで潤い，近代化が一気に進んで高層ビルが立ち並ぶようになり，文化や芸術も盛んになって文化都市としての輝きも放つようになった[10]。タンストール（2013）によれば，その一方で，音楽家を志す若者を受け入れる土壌はできておらず，ベネズエラのクラシック音楽界は北米や欧州の奏者ばかりで構成され，エリートや裕福層が対象とされていた[11]。

> アヴレウ自身も 18 歳でカラカスへやって来たとき，この街は経済成長で活気づいてはいるものの，音楽家を目指す若者にはとても冷たいと感じた。だからこそ，音楽を究めるとい

う野心と，経済を学ぶという現実的な選択を両立しようと考えた[12]。

アヴレウ博士はこうして，音楽家として，経済学者として，El Sistema への道を切り拓いていくことになる。そして El Sistema 誕生の背景には，先述したようなベネズエラの文化土壌，アヴレウ博士の音楽大学生時代，そして，幼少期の彼の音楽体験などがあり，それらを抜きにして語ることはできない。そもそも El Sistema 誕生の経緯には，アヴレウ博士が音楽大学生時代に合奏する仲間を募ったことにある。タンストール（2013）によると，場所さえあればどんなところでも練習し，手当たり次第にいろんな曲を演奏した若者たちに対し，音大の教授は冷たい視線を向けるだけだったが，中には理解を示す先生がいて，アヴレウ博士は支援してくれそうな先生に指導役を頼んだと報告されている[13]。そして，タンストール（2013）は，「学びたい若者がいて，彼らにオーケストラの楽譜の読み方や奏法を教えてくれた素晴らしい先生たちがいた。まさにこれが，システマ誕生へとつながる経緯です」と語るアヴレウ博士の言葉を紹介している[14]。またタンストール（2013）は，アヴレウ博士が始めた試みを広げるためにユース・オーケストラをつくり，練習場所として使われていないガレージを用意したと述べている[15]。練習場所を見つけたアヴレウ博士は周りに声をかけ，初日には 11 人で，翌日には 25 人で，その次の日には 46 人で練習を行うようになり，その人数は日に日に増えて 1 ヵ月も経たないうちに 75 人の若者が集まったとされる[16]。この活動が El Sistema の誕生であり，ベネズエラ人によるオーケストラが自発的に生まれた瞬間であった。そしてオーケストラを存続させるため，アヴレウ博士はかつての恩師，ドラリーサ・ヒメネス・デ・メディナ（以下，ヒメネスと表記する。）から学んだ 2 つの教訓を重視したという。「1 つは，生徒たちが協力し合い，教え合うこと。もう 1 つは，しょっちゅう人前で演奏すること[17]」である。タンストール（2013）では，アヴレウ博士は幼い頃，バルキシメトでヒメネスが主宰するピアノ教室に通っていた経験があり，その生徒は貧しい家庭の子が多く，ヒメネスもまた裕福な人ではなかったが，ほんのわずかな月謝しか受け取らず，それすらも払うことができない生徒には無料で教えたと報告される[18]。そしてまた，タンストール（2013）は El Sistema の基本理念は，このようにアヴレウ博士自身の音楽体験から生まれており，教育，音楽，そしてコミュニティーに対する彼のビジョンのなかに，ヒメネスという優れた指導者の精神が生き続けていると考察している[19]。タンストール（2013）は，ヒメネスの教えを振り返るアヴレウ博士自身の言葉を以下のように紹介している。

「厳しい教師についていたら，背後から睨まれて重圧を感じていたでしょう。ドラリーサ先生はそうではなく，私たちに音楽を通してコミュニティーの一員として生きることを実感させ，そこには喜びがあふれていることを教えてくれたのです。先生のところで教わったことが私の人生を決定づけました[20]」（下線は筆者による。）

下線部から読み取ることができるように，アヴレウ博士は El Sistema で音楽の上達そのものを目指していたわけではなく，ベネズエラ人としてのコミュニティーの中で，一人ひとりが役割を全うして生きていく力を身につけることを目的とし，その手段に音楽を用いたのである。1-1.でも触れたが，社会的な貧しさから十分な教育を受けることができず，芸術へのアクセスを含む様々な機会が奪われてしまう貧困層の子どもにとって，El Sistema の取り組みがいかに意義深いものかがわかる。

そして，アヴレウ博士は結成して 1 年も経たないオーケストラを，1976 年にスコットランドで開催される国際音楽祭に参加させると決めた[21]。オーケストラはその音楽祭で快挙を達成し，アヴレウ博士はベネズエラ政府を説得して支援を取りつけることができた[22]。この出来事に関してタンストール（2013）は，アヴレウ博士の言葉を以下のように紹介している。

「芸術振興ではなく，音楽を活用した青少年育成プログラムとして支援してほしいと，ペレス大統領に頼みました。当時のベネズエラには，青少年に特化した役所があったので，そこに支援してもらうのが理想的だと思いました」
（中略）

「青年省（現在の人民権力青年省）では，特に低所得者層の子どもたちと若者を支援することに，当時熱心に取り組んでいたからです。一般的に音楽家が優先したいこととは違うでしょうが，私にとっては，若い人たちを助けることがいつも最優先でした[23]」（下線は筆者による。）

下線部より，アヴレウ博士が El Sistema を開始するにあたって込めた想いや，活動のスローガンである「Tocar, Cantar y Luchar（奏でよ，歌えよ，そして闘え）」に納得できるだろう。アヴレウ博士や，彼の意志を引き継いだ El Sistema では困難に直面した際，武力などの負の側面で対抗しようとするのではなく，音楽の力や仲間との約束などの正の側面で乗り越えていくことを目指している。そして彼は，ベネズエラ人や若者に門戸が開かれていなかった文化芸術への道を切り拓いていった先駆者でもあった。家庭が貧困であることは金銭的に苦しいだけでなく，そのことに付随して様々な機会が剥奪されてしまうことにも問題がある。よって，貧困の中で生きる子どもや若者が，文化芸術へアクセスできる環境を整えたことに価値があるといえる。こうして El Sistema を国家プロジェクトに据えたアヴレウ博士は，活動の規模をさらに拡大していく。その後 El Sistema はベネズエラ全土に広まっていき，ヌクレオ〈Núcleo〉と呼ばれる音楽教室が至る所に設置され，1980 年代のはじめには El Sistema の音楽学校シモン・ボリバル音楽院が設立された。太田（2014）はヌクレオについて以下のように説明している。

全国的に，文字通り「誰もが参加できる」ためには，地域にオーケストラ活動をする場が必要であり，それを実現するために設置されたのがヌクレオである。
Núcleo とは「中核」「土台」という意味であるが，地域のオーケストラ活動の拠点である[24]。

地方各地にヌクレオを設置するにあたり，アヴレウ博士は場所や資金，子どもたちに教える人材を確保した。こうして音楽大学の学生から始まった El Sistema は次第に対象を広げ，乳幼児から児童などの幼い子どもたちをも含むようになる。早期教育の根本的な方針とその実践法を確立することに取り組む人たちがいる中で，バイオリン奏者のスーザン・シマンがその先頭に立った[25]。彼女が子どもたちにバイオリンを教えたところ，指導者として優れた才能を発揮し，子どもがオーケストラでうまくやるためにはどのように教えるのが良いか考え，以下のような実践を行った。

木材や紙を使って楽器の模型を作らせたのは，手足を動かす能力を高めるためだった。本物の楽器を扱える年齢に達する前に，小さな子どもたちは模型を使って「演奏」を学ぶ。これをやることで，楽器を大切に扱い，手入れをすることの重要性も教えることができるという[26]。

上記の「楽器の模型」は，紙で作られたバイオリンのことを指し，一般に「ペーパー・バイオリン」と呼ばれている。ペーパー・バイオリンが生まれた背景には，El Sistema がベネズエラ国内で急速に広まったことによる楽器不足もある。苦肉の策に様々な教育効果があることがわかり，子どものための活動としてペーパー・オーケストラが確立していった。

また，ヌクレオの中には赤ちゃんとその母親が音楽活動をしている場所があったり，El Sistema の理念のもと，受刑者たちの更生を目的に，刑務所で音楽活動が行われていたりする。El Sistema の対象は非常に広がっており，活動に共通の理念や目標，運用などはあるものの，各ヌクレオは対象によって柔軟に活動内容を決めている。そしてこのことに関し，アヴレウ博士は次のように述べている。

「実を言うと，私は『システマ（英語のシステム）』という言い方は，あまり好きじゃない。ベネズエラでは，物事がネットワークのなかで複製されると，それをシステムと呼ぶから，その名前がついたわけだけど，我々がやっていることはシステムではないからね」
（中略）
「存在するけど，まだかたちになっていない」
（中略）
「なにかをシステムとして定義したら，その日からその命は消えてしまう[27]」

アヴレウ博士は秩序だった形式的な活動を目指したのではなく，それぞれがニーズに合わせて柔軟に活動できる余地を残していたのである。エル・システマジャパンによると，ベネズエラで始まった El Sistema はその教育的価値や社会的意義が認められて世界中に広がり，2022 年現在では 70 以上の国や地域で行われている [28]。このように活動が世界規模で広がった背景には，アヴレウ博士の確固たる理念の継承と，それぞれの国や地域のニーズに合わせて適応できる柔軟な活動があるからだと考える。そこで次項では，日本において 2012 年から始まったエル・システマの活動について概観していく。

1.3 日本におけるエル・システマ

日本では，エル・システマジャパン〈Friends of El Sistema Japan〉という団体が 2012 年 3 月に発足し，その 2 ヶ月後には相馬市との間で協定が結ばれ，活動が始まった。代表はユニセフやユネスコ，日本ユニセフ協会などで働いた経験のある菊川穣（きくがわゆたか）氏である。ベネズエラの活動では，特に貧困層の子どもへの社会的な支援の側面が見られたが，日本で活動を開始したきっかけは 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災である。2022 年現在，東日本大震災で観測された地震のマグニチュードは日本において史上最大であり，地震によって引き起こされた二次災害の大きさも深刻であった。例えば，東日本大震災による災害は，地震による揺れ，津波，福島第一原発事故，液状化現象など，広範囲かつ多岐にわたって挙げられる。人々が受けた被害は身体的にも精神的にも大きく，被災者は心のケア [注 3] を必要としていた。岩井（2017）によると，東日本大震災の直後，菊川氏は日本ユニセフ協会緊急支援本部で責任者として現場を指揮しており，東北の中でも特に福島県の被害の深刻さに気づき，福島の子どもたちに対し，長く寄り添う支援の必要性を感じずにはいられなかったと報告している [29]。そこでエル・システマジャパンを震災の翌年に発足し，「子どもたちが音楽に向き合うことをとおして，自信や尊厳を取りもどし，自分の人生を切り開いていく力をはぐくむことを目的に [30]」，福島県相馬市，岩手県大槌町から活動を開始し，現在では長野県駒ヶ根市，東京都の 4 拠点で活動している。エル・システマジャパンのホームページをもとに，2012 年の発足から現在に至るまでの年表を記す（Table 4）。

Table 4　A chronology of Friends of El Sistema Japan [31]

年	場所	活動内容
2012	福島県 相馬市	小学校への部活支援として開始。「相馬子どもオーケストラ＆コーラス」が結成し，総勢 90 名の子どもが活動。 対象は市内約 2,000 名の子ども。
2014	岩手県 大槌町	放課後クラブや中高生の吹奏楽部の活動への支援が始まる。総勢約 100 名の子どもたちが音楽活動をし，週末教室を中心に「大槌子どもオーケストラ」として活動。
2017	長野県 駒ヶ根市	「駒ヶ根子どもオーケストラ」では，市内全域から 80 名の児童・生徒が集まって活動。
	東京都	「東京ホワイトハンドコーラス」の始動。視覚障害や聴覚障害などをもつ子どもや友だちと一緒に音楽活動を行う。 （2022 年 3 月 23 日：「東京ホワイトハンドコーラス」は「東京子どもアンサンブル」と「クリエイティブ・ワークショップ」に再編された。）

2017 年には長野県で活動が始まっているが，それは，震災から 6 年経ち，被災地以外でも相対的に芸術にかかわる機会の限られている地域や子どもへと活動の対象を広げたためである。また，同年に始まったホワイトハンドコーラスの活動は現在，エル・システマコネクト〈El Sistema Connect〉が主体となっており，次項にて詳しく記載するため，ここでは紹介に留めておく。

いずれにせよ，ベネズエラでの活動と日本での活動の背景は異なるものの，中心となる理念は同じである。何らかの困難を抱える子どもに対して音楽芸術へのアクセスを保障し，その環境を用意し，音楽の力で困難を乗り越えることを目指している。

子どもたちはエル・システマによって，これまでに国内外で様々なコンサートや交流，共演を行っている。岩井（2017）によると，発足からわずか 3 年後の 2015 年には El Sistema 出身の著名な指揮者グスターボ・ドゥダメル氏と，彼が音楽監督をつとめる LA フィル（ロサンゼルス・フィルハーモニック）のユース・オーケストラである YOLA（ヨーラ）と東京にて共演を果たしたと報告されている [32]。ま

たその翌年，2016 年には，もともと寄付を受けていたベルリン日独センターからの招待をきっかけに，ドイツ公演も行われた [33]。子どもたちはエル・システマによって様々なコミュニティーとつながり，その過程で自身もまた，日本におけるエル・システマの一員であるという意識が芽生える。したがって，エル・システマでは音楽活動を通して社会性や規範感覚，コミュニティー意識などの育ちが期待でき，社会的・教育的側面があると考えられる。

また，活動内容は El Sistema から学び，そのまま取り入れたものもあれば，活動する地域に合わせて適応させたものもある。例えば，ペーパー・バイオリンの活動は日本でもそのまま取り入れられ，専用の工作キットを用意してワークショップが行われている。子どもたちは自分の楽器を自分で作ることで愛着がわき，楽器の正しい持ち方や弾くときの姿勢，バイオリンの仕組みなどについて楽しみながら学ぶことができる。ベネズエラでも日本でも，オーケストラでの楽器演奏を誰もが許されているという仕組みゆえ，メンバーの中にはまったくの初心者も含まれるが，このように楽しみながら演奏について学ぶことのできる活動は特徴の一つであるといえる。次に，地域に適応させた活動の例として，初心者向けの練習メニューである『ミッキーマウス・マーチ』のダンスレッスンや，バイオリンの弦を色分けし，視覚的に覚えるような工夫が挙げられる [34]。岩井（2017）では，前者のダンスレッスンは，弦楽器において大切な「アップビート」と「ダウンビート」の違いを体で感じ取るためのリズム学習の役割を果たしているとされる。後者について補足するが，バイオリンの“こま”の部分を大きくした紙を用意し，4 つの弦を赤，青，黄，緑の色別にする。そして子どもたちも自分のバイオリンの“こま”に同じように 4 色のシールを貼る。さらに，エル・システマで使用している音階練習のオリジナルテキストの音符も同じように 4 色に分かれている。そこで子どもたちは色によって音と弦の組み合わせを覚えていく。日本では義務教育において小学校で鍵盤ハーモニカを習うが，その際にもドレミの階名と鍵盤の位置を対応づけるため，シールを貼る場面はよく見られる。以上に挙げた例から，日本の子どもたちが活動しやすいよう柔軟に活動内容や指導アプローチを工夫することで，教育制度や社会背景の異なる日本にもエル・システマが根づいていったと考えられる。

2. 障害者の参加を促す El Sistema

2.1 White Hands Choir の誕生

本項では，El Sistema における特別教育プログラム White Hands Choir について取り上げる。White Hands Choir とはその名のとおり，白い手袋をはめ，音楽に合わせて手による表現を行う“サイン隊”と合唱をする“声隊（こえたい）”が合わさり，一つの音楽を創り上げる合唱団のことである。西部のララ州にあるバルキシメトのヌクレオにおいて，1995 年に障害をもつ子どもに対し，El Sistema の「すべての子どもに音楽の機会を与える」という理念を達成するべく取り組みが始まった。バルキシメトは工業都市であるが，ベネズエラにおいて音楽にゆかりのある都市とされており，アヴレウ博士が恩師ヒメネスからピアノを教わった地でもあり，先述したドゥダメル氏をはじめとする El Sistema の代表的な音楽家が生まれた地でもある。バルキシメトのヌクレオでは，障害をもつ子どもたちをオーケストラや合唱で一緒に演奏させるプログラムが整っており，生徒の中には視覚障害，聴覚障害，発達障害，自閉症などが含まれる [35]。視覚障害をもつ子どもに対しては，あらかじめ点字翻訳した楽譜を渡すことで，健常者と同じように演奏できるような配慮が見られる。また，子どもたちは学校では十分な支援を受けられないため，音楽以外の本でもできるだけ点字翻訳するようにしており，子どもたちに立ちはだかる社会の壁を取り除くことが職員の使命だと考えている [36]。ここで注意すべきことは，障害者を対象として行われるこの取り組みは音楽療法なのか，ということである。このことに関してタンストール（2013）は，バルキシメトの指導者ゴメス氏の言葉を以下のように紹介している。

> 「長いこと，障害を持つ人たちの活動は，治療という観点からアプローチするのが普通でした。でも，障害はなくなるものではない。だから，施すべき治療などないのです」
> （中略）
> 「子どもたち一人ひとりの『できること』を見つけ，それを伸ばしてあげる。障害は脇へ置いて，その子の持つそれ以外の部分が育つようにするのです。どんな人にも，才能や潜在能力があり，成長する力がある。そして，

人間の魂に障害はありません[37]」

いかなる困難があっても音楽を通して乗り越えていくこと，そこに障害の有無は関係ないという，力強いメッセージが伝わってくる。もちろん障害の特性によって必要な配慮は異なるため，先述したように，それぞれに適切なプログラムが用意されている。その一つが点字翻訳であり，White Hands Choir なのである。特に White Hands Choir では，聴覚障害者には立ち入ることの難しい音楽活動への参加を保障したことが意義深い。聴覚障害者が音楽やリズムをどのように捉え，実践しているかについて議論する余地はあるだろうが，実際の音楽活動を目にすると，彼らの身体を介し，音楽に合わせて表現しているように見える。White Hands Choir による実践は，El Sistema の理念を最もよく表す活動といっても過言ではない。

2.2 ホワイトハンドコーラスによる実践

日本においては 2017 年からホワイトハンドコーラスの活動が始まり，東京ホワイトハンドコーラスを母体に，2020 年より公益財団法人東京都歴史文化財団東京芸術劇場との共催事業として，東京・京都において新体制で活動を行っている。さらに，2022 年からは沖縄にも拠点を増やした。El Sistema が世界各国に広がりを見せているのに対し，White Hands Choir の活動は 2022 年現在，ホワイトハンドコーラス NIPPON がベネズエラ国外で認められた唯一の団体である。メンバーの年代は幼児から高校生までと幅広く，視覚障害，聴覚障害，発達障害をもつ子どもも含まれる。活動内容に関してはベネズエラのものと相違なく，手による“手歌（しゅか）”で表現する“サイン隊”と，声による歌で表現する“声隊（こえたい）”に分かれ，一つの音楽を創り上げている。一般に，歌詞に手話をつける表現は“手話歌”として存在し，日本の学校教育においても手話を知るため，手話に親しむために実践されることがある。しかし，それと“手歌”は区別するべきである。“手歌”は，歌詞に合わせて子どもたちが自ら意見を出し合い，手話をアレンジして創り出される。なぜなら，ろう者の中で豊かに育まれてきた手話文化を大切にし，ろう者による表現を尊重しているためである。子どもたちは話し合いをするうちに，ろう者の文化に触れ，また，聴者の文化に触れながら活動を行っている。

現在，ホワイトハンドコーラスの活動を牽引しているエル・システマコネクトは，ホワイトハンドコーラスのミッションを次のように挙げる。①多様なメンバーの当事者性を大切にし，互いが支え合うことで，潜在能力を引き出せる居場所を作ること，②ろう者から生まれた音楽表現である，“手歌”の新しい芸術表現を切り拓くこと，③舞台からインクルーシブなモデルを発信し，社会における意識の転換を図ること，である[38]。ミッション①の潜在能力を引き出すことは，White Hands Choir の指導者ゴメス氏の理念『できること』を伸ばすことと同じ意味をもつといえる。ミッション②では，これまでろう者に門戸が開かれていなかった音楽表現を“手歌”によって保障し，切り拓いていくことを目指している。そしてミッション③では，自らの活動をもってインクルーシブな音楽活動のモデルを社会に示すという役割を掲げている。3 つのミッションからは，ろう者に開かれた豊かな音楽表現を切り拓き，それを社会に還元していこうとする動きが見られる。

ホワイトハンドコーラスは，国内の様々な場所で公演を行ったり，NHK『みんなのうた』のコーナーに出演したりしている。また，ホワイトハンドコーラスの講師である井崎哲也氏とコロンえりか氏が NHK『おかあさんといっしょ』の 2022 年 4 月からのエンディング曲『きんらきら　ぽん』（作詞：齊藤陽道，作曲：牧野奏海）の手話監修，振付を担当したことでも知られる[39]。井崎氏は日本ろう者劇団顧問でもあり，「耳が聞こえない私にとって音楽は苦手なものだった。でも声に手歌を合わせることで，ひとつの歌になる。サイン隊の子どもたちが表情豊かに楽しげにアイデアを出す姿が何よりうれしい[40]」と語る。この言葉からは，日本において，ろう者に開かれた音楽がいかに少ないのか，もしくは，存在しないとされているのかがわかるだろう。しかし，ホワイトハンドコーラスは，聴覚や発声に障害をもつ子どもに対しても音楽の機会を保障しており，インクルーシブな音楽活動として，先進的な取り組みだといえる。

以上のことから，ホワイトハンドコーラスはベネズエラにおける活動の理念を引き継ぎながら，日本に馴染むように活動を組み立て，ろう者に開かれた新たな音楽表現を創造していることがわかる。

おわりに

日本とベネズエラにおける社会情勢や貧困の深刻さ，教育制度などは異なるが，El Sistema で大切にしている理念は継承しつつ，日本に合わせた形態で活動を取り入れていることがわかった。特に日本では，エル・システマが始まるきっかけが自然災害であり，社会的な貧困と自然災害による被害は異なる性質をもつだろう。しかし，子どもたちに訪れる“困難”という点や，その困難を乗り越えるために音楽を用いたという点は同じである。貧困も自然災害も，個人の力ではなかなか太刀打ちできないものであるが，仲間と共に，エル・システマ〈El Sistema〉というコミュニティーの一員としてならば，乗り越えることができる。また，その活力を与えてくれるのが音楽である。音楽そのものが貧困の解決策にはならず，自然災害そのものを防ぐわけでもないが，音楽によって前向きな気持ちが生じたり，心が癒されたりする。このことからも，エル・システマ〈El Sistema〉は社会的意義をもつと主張できる。さらにエル・システマ〈El Sistema〉では，音楽活動を通して社会性や規範感覚，コミュニティー意識などの育ちが期待でき，社会的・教育的側面があることもわかった。

El Sistema 誕生から 20 年後には，活動の対象は障害をもつ子どもにも拡大した。El Sistema の「すべての子どもに音楽の機会を与える」という理念の一つを中心に，多様な障害をもつ子どもも音楽活動に参加することのできる White Hands Choir が始まった。そしてこの活動によって，これまで音楽の機会が保障されてこなかった子どもたちも，音楽表現をすることができるようになった。障害者に対する音楽アプローチは音楽療法が一般的であったことに対し，White Hands Choir を一つの芸術表現として打ち出したことは画期的であった。

日本においては 2017 年からホワイトハンドコーラスの活動が始まり，2022 年現在では，多様な子どもたちが共に同じ場で，学び合いながら音楽活動を行っている。日本ではまだ活動開始から 5 年が経過したところであり，その歴史は浅い。現在は活動の試行錯誤を重ねている段階であり，今後は，より洗練され，ますます活動の幅を広げ，展開していくだろう。そのためには日本で活動を理解してもらうことが必要であり，ある程度の制度化された枠組みが求められると予想できる。しかし，制度化された枠組みは El Sistema の創始者アヴレウ博士の理念とは真っ向から対立する。このジレンマとどのように向き合い，日本に適応した活動を創っていくのか，今後も動向に注目したい。

注釈

注1）雇用・就学の機会や人種・宗教・国籍・性別の違い，あるいは疾患などによって，所得・身体能力・発言力などが制限され，社会的に不利な立場にある人。高齢者・障害者・児童・女性・失業者・少数民族・難民・貧困層などが社会的弱者となり得る[41]。

注2）「共生社会」とは，これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が，積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは，誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い，人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である[42]。

注3）危機的出来事などに遭遇した為に発生する心身の健康に関する多様な問題を予防すること，あるいはその回復を援助する活動を心のケア（活動）と呼ぶ[43]。

引用参考文献・図書

1）文部科学省（2012.7）「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要」（2022.10.5 閲覧）〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm〉

2）在日ベネズエラ大使館「ベネズエラの概要」（2022.10.6 閲覧）〈https://venezuela.or.jp/about/basic/〉

3）外務省「ベネズエラ基礎データ」（2022.10.6 閲覧）〈https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/venezuela/data.html〉

4）外務省海外安全ホームページ（2022.3）「ベネズエラ安全対策基礎データ」（2022.10.6 閲覧）〈 https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcsafetymeasure_260.html〉

5）厚生労働省（2020，2021）「人口動態調査」（2022.10.8 閲覧）〈https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html〉

6）World Vision「ベネズエラの教育をわかりやすく解説【現状と問題，背景まで】」（2022.10.9 閲覧）〈https://www.worldvision.jp/children/education_20.html〉
7）前掲 6
8）前掲 6
9）外務省「世界の学校を見てみよう！」（2022.10.9 閲覧）〈https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/venez_1.html〉
10）トリシア・タンストール〈Tricia Tunstall〉著／原賀真紀子　訳（2013）『世界でいちばん貧しくて美しいオーケストラ』東洋経済新報社，pp.78-79
11）前掲書 10，p.79
12）前掲書 10，p.79
13）前掲書 10，p.81
14）前掲書 10，p.82
15）前掲書 10，p.82
16）前掲書 10，pp.82-83
17）前掲書 10，p.83
18）前掲書 10，pp.76-78
19）前掲書 10，pp.77-78
20）前掲書 10，p.78
21）前掲書 10，p.90
22）前掲書 10，p.92
23）前掲書 10，p.93
24）太田和敬（2014）「エル・システマの研究（下）―刑務所におけるオーケストラ活動の矯正教育的側面を中心に―」『人間科学研究』立教大学人間科学部　第 36 号（pp.39-65）
25）前掲書 10，p.101
26）前掲書 10，p.102
27）前掲書 10，p.179
28）エル・システマジャパン「ベネズエラから世界へ」（2022.10.11 閲覧）〈https://www.elsistemajapan.org/worldwide〉
29）岩井光子（2017）『未来をはこぶオーケストラ福島に奇跡を届けたエル・システマ』汐文社，p. 25
30）前掲 28
31）前掲 28
32）前掲書 29，p.83
33）前掲書 29，p.106
34）前掲書 29，pp.60-62
35）前掲書 10，pp.188-189
36）前掲書 10，p.189
37）前掲書 10，p.194
38）エル・システマコネクト「ホワイトハンドコーラスのミッション」（2022.10.16 閲覧）〈https://elsistemaconnect.or.jp/white-hand-chorus-nippon/〉
39）ポニーキャニオン「手話でうたおう！きんらきら　ぽん」（2022.10.27 閲覧）〈https://mama.ponycanyon.co.jp/kinrakira-pon/〉
40）HEART & DESIGN FOR ALL「共に奏でる喜び伝えるホワイトハンドコーラス」（2020.2.6）（2022.10.17 閲覧）〈https://heart-design.jp/report/article200131_001/〉
41）コトバンク「社会的弱者」（2022.10.17 閲覧）〈https://kotobank.jp/word/社会的弱者-671656〉
42）前掲 1
43）文部科学省「第 1 章　心のケア　総論」（2022.10.27 閲覧）〈https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/003/010/002.htm〉

指導教員：人間生活学研究科 人間発達学専攻
根津知佳子教授